

第38回

わたしからの人権メッセー

ジ

2017年精選作品集

堺市人権教育推進協議会

第三十八回

わたしからの人権メッセージ

特選作品集

「わたしからの人権メッセージ」発刊にあたって

堺市人権教育推進協議会では、人権を守り、平和で差別のない明るいまちづくりをめざして、市民主体の活動を進めています。その活動の一つが、本年度で第三十八回を迎える「わたしからの人権メッセージ」です。たくさんの方の皆様が日常生活の中の人権問題に関心を持ち、自ら考え綴ることによって人権についての認識と理解を深め、さらに作品の共有を通して広く人権啓発につなげることを目的として実施しております。

今年度も、私たちの呼びかけに幅広い年齢層の皆様から、数多くのメッセージを寄せていただきました。作品を応募していただきました皆様に心からお礼を申し上げます。厳正なる審査の結果、優秀な作品二十点を特選作品とし、ここに、「わたしからの人権メッセージ」特選作品集として本冊子を発刊します。

人権が尊重され、平和で差別のない社会を創り出そうという応募された皆様の真っ直ぐな熱い想いと、真摯な姿勢には心を打たれるものがあります。

堺市では、「堺市平和と人権を尊重するまちづくり条例」を施行し、すべての人の人権が尊重され、安心して暮らすことのできる平和と人権尊重のまちづくりを積極的に推進しています。しかしなが

ら残念なことに、同和地区の人々や女性、障がい者、外国人、子ども、高齢者、LGBTなど性的マイノリティの人々や特定疾病者などに対する差別や偏見、虐待など心を痛める事象が起っています。近年では、インターネットを悪用した人権侵害も深刻な課題です。世界では、今も多くの人々の尊厳が、戦争や民族紛争等により失われており、人々の暮らしに深刻な影響を与える環境汚染も発生しています。

すべての人々が尊厳ある生命を全うし、自分らしく安心して暮らすことのできる社会の実現は、人類普遍の願いです。

そのような社会を実現するには、私たち市民がさまざまな人権問題を自分自身の課題として受けとめ、日々の生活の中で人権を尊重する積極的な行動へと発展させていくことが大切です。

この作品集が一人でも多くの方々に愛読され、私たちの身近にある人権問題を考えるひとつのきっかけとなり、私たちのまち堺から人権文化の花を咲かせる一助になることを期待しています。

二〇一七年十二月

堺市人権教育推進協議会

会長 金丸 尚弘

もくじ

□ みんな同じ	1
□ わたしの社会さんか	3
□ 女性の人権について	5
□ さみしいきもち さようなら	7
□ 心の底から笑顔に	9
□ 九十九歳の曾祖母から学んだこと	13
□ 共に生きる社会をめざして	15
□ 私たちにできること	17
□ 桃からふと考えたこと	19
□ ランドセルの送り先	23

□ 命の選択	25
□ 手話は言語	29
□ 私は、子どもが欲しいのかな？	31
□ 「自分らしく」が認められる社会へ	33
□ 彼の色	37
□ 先生の言葉	41
□ ゆつくりのんびり、そんな気持ちになりました	45
□ 「言葉」の力	49
□ 私の友人	53
□ その一言は	55

※ご本人の希望により、お名前等が掲載されていない場合があります。

みんな同じ

小学校二年

長濱 美来 ながはま みく

「しょうがいのある人」というと、「とくべつな人」と思う人が多いと思いますが、じぶんのまわりの人たちを見てみると、いがいにみぢかにおられます。

じつは、わたしのそ父母は、ちようかくしょうがいしゃです。そ父は生まれたときは聞こえていたようですが、3さいくらいにストレプトマイシンというこうせいぶつしつのちゆうしゃで、耳が聞こえなくなつたと言っており、そ母については、生まれつき耳が聞こえないと言っていました。

ちようかくしょうがいしゃは、見た目にはしょうがいがあるかどうか分かりません。しかし、そ父母は、こえを出してお話ができません。そのかわりに手話で話をします。手話でお話をする、まわりからジロジロと見られたり、ゆびをさされたりすることがよくあると、そ父母が言っていました。見ている人は、みんながみんなわるぎがあつて見ていないと思いますが、わたしもそ父母と手話で話をしていると、子どもや大人にジロジロと見られることがあります。そのときは、とてもいやな気持ちになりました。そ父母は、そんないやな気持ちをもつて生きてきたと思うと、かなしくなり

ました。

そ父母は、たしかに聞こえませんが、しかし、耳が聞こえないだけで、ほかの人となにもかわりがありません。わたしにとっては、やさしい大すきなおじいちゃん、おばあちゃんです。よの中に、色いろなしょうがいしゃがいることをりかいし、それをこせいとしてみとめること、しょうがいしゃにかぎらず、あいての立場になつて、色いろな人の立場になつてもものごとを考えられるような人がふえていつてほしいと思います。それが、わたしのそ父母だけではなく、色いろな人のすみやすいまちになると思っています。わたしもあい手の立場になつてもものごとを考えらる人になりたいです。



わたしの社会さんか

小学校二年

奥村真惟

わたしはかみの毛をずっとのばしています。だけど、先日こしまであつたかみを、かた上まで切りました。ヘアドネーションをするためです。

ヘアドネーションは、びょう気などでかみの毛がなかったりする人のためにかつらをつくるのに、かみをきふすることです。三十センチメートルい上いるそうです。

はじめは、年長のときに、こしまでかみがあつたので、おかあさんにおともだちのためにかみをあげてみないかと、ヘアドネーションについてせつめいされました。びょう気がかみがなくなることがどんなにつらいことかと思うと、むねがいつぱいになりました。

長いかみが大すきだったので、切ったときは、なみだがあふれましたが、どこかのおともだちのためになつてうれしかったです。

そして、かみを切ってくれたびょうしさんが、「ありがとう。えらかったね。」と言ってくれました。また、かみをのばしてヘアドネーションしようと思いました。

2年生の夏休み、やっとかみがこしまでのびたので、2ど目のヘアドネーションが

できてうれしかったです。

ちいさなわたしには、だれかのためになにかできることはすくないです。でも、わたしにしかできないことを、わたしなりにしたいです。その一つがヘアドネーションです。

つぎは5年生くらいなので、すてきなおねえさんになつてみたいです。



女性の人権について

小学校五年

井 上 将 太

ある日、仕事から帰って来たぼくのお母さんが、おこっていました。理由を聞くと、仕事中に、お客さんから「女のくせに働きやがつて。こんな夕方まで。女は家でやることがあるだろう」と言われたと、悲しそうに言っていました。

ぼくは、すぐになんでだろうと考えましたが、言葉が思いつきませんでした。少し時間をかけて考えました。

ぼくのお母さんは、ぼくの妹が産まれてもずっとお仕事をしていますが、帰ったらすぐに、洗たくや夕食の用意をしてくれています。ぼくや妹が小学生になつてからは、家のお手伝いができるだけしているのです。お母さんは助かっていると言っていました。ぼくには、お母さんが働かずに家にいてくれる友達もいます。家にいるお母さんは、家の中のお仕事がたくさんあることも、教えてもらいました。

女が働いてはダメではないと思います。

ぼくのお母さんは、元気に楽しそうに、お仕事をしてくれて、家のお仕事も大変そうだけどやってくれます。

それぞれの家で、形はちがうとお母さんはいつも言います。

ぼくはちゃんとそのことを理解しているので、お母さんを悲しい気持ちにさせてしまった、そのお客さんに伝えたいです。

でも本当は少し家にいてほしい気持ちのときもあつたので、もしかすると、そのお客さんもそういうさみしい気持ちになつたことがある人なのかも知れません。

いつまでも元気に楽しそうにお仕事をしているお母さんでいてほしいです。



さみしいきもち さようなら

小学校五年

中野雪兔なかのゆきと

ぼくは、五年生になつてから、おともだちがだんだんとはなれていつてるきがしてん。はなしかけても

「あーはいはい。」

つていうし、まえは、いっしょにあそんでたのに、ほかのおともだちとあそびにいつてしまうねん。

おいていかれてさみしいけど、ぼくがまきつこやからしやあないなつておもつてん。ぼくは、あたらしいおともだちをつくつたり、またまえのように、おともだちとあそべるようにがんばらなあかんとおもつて、みんながやりたがらへんことをやつてみたいとおもつて。

うまいけへんことがあるけど、先生やおともだちがたすけてくれたり、『がんばろう。』つてこえをかけてくれたりしてくれる。ちよつと『じぶんでやるからほつて。』つておもつたりしたけど、でも、こまつてるぼくをまもつてくれてありがとうつておもう。

ぼくは

「やつぱりできひんことがあるんやな。さみしいな。」

つてママにいうたら、びょういんの中川先生のとこへつれていつてくれたよ。

中川先生は、ぼくがようちえんのときからおはなしをきいてくれたりあそんでくれたりしてる。中川先生は

「みんな、なやんだりけんかしたりなかよくなつたり、かんがえる年になつて心が大きくせいちようしてる。ゆつくんだだけささみしいつてかんじてるわけじゃないんだよ。」

つていうてた。

ぼくは、『みんなもがんばつてるんか。』とおもつて『しやあない。』じゃないねんなどおもつた。

ぼくのすきなウルトラマンのうたの中で、『ちようせんしないせいこうなんてないさ。だから、ためらわずつきすめ。』つていうかしがある。ぼくはいつもウルトラマンにはげましてもらつてゐる。しゆくはくくんれんがおわつたあとも、セブンからがみがといたよ。

ぼくががんばるすがたをみてくれる人やウルトラマンがいるんや。だから、さみしいきもちときようならして、ゆめにむかつてがんばろうとおもう。

※「まきつこ」は支援学級のことです。

心の底から笑顔に

小学校六年

大^{おお} 仲^{なか} 璃々^{りり} 杏^あ

いじめられている人が「やめて。」と声に出すことができると思いますか。心の底から笑顔になれると思いますか。みんなが毎日明るく過ごしていくためには何が必要だと思いますか。

私の学年に、たたかれたりけられたり、「きもい。」とか「近づかん」とか言われている子がいました。その子はとても優しかったのですが、みんなのように勉強についていけず、低学年から少しいやがらせをされていました。そして、高学年になるにつれ、いやがらせがひどくなっていきました。しかし、こんなひどいことをされてもその子は笑っていました。クラスのムードメーカーの一人がみんなの前でその子をけり、みんなで笑っていました。まるでいじめていることが楽しいかのようでも、「やめて。」とも言わず笑っていました。本当に楽しくて心の底から笑っていたのでしょうか。やめてほしくなかったのでしょうか。絶対ちがうと思います。いやだと思っているし、友達と同じようにふつうに接してほしい。でも、みんなに注目されているし。とてもなやんだんじゃないでしょうか。みんなからの視線がとても怖か

ったと思います。

しかし私は、「やめとき。」と言って止めることができませんでした。言ってもやめないし、先生のいないところでしていました。でも、もうちょつと勇気を出し、みんなを止めることができていけば、その子は怖い思いをせず、少しでも心の底から笑い、みんなと楽しむことができたんじゃないかなととても後悔しています。

「本当はいややったやんな。」ってその子に聞いてみました。すると、「そうやって気にかけてくれたらうれしいで。ほんまにいややわあ。勉強も頑張つてんのに。」と、言っていました。注目されているからうれしいと思っただけで、ほんまはいやなんだなと、思いました。

いじめで苦しんでいる人が、もういじめを受けないためには、私たちが少しでも相談にのり、「やめてあげて。」と一言いつてあげることが大事だと思います。誰だつていじめられてうれしいわけがありません。きつといじめられたら腹が立つし、くやしいし、いやだつて思うはずです。だから、人を差別するとか、接し方を変えたりするのは絶対だめだと思います。でも、心で思っているだけでは、いじめはなくなりません。いじめにあっている友達がいたら「やめようよ。」と言い、行動していくことが大事だと思います。みんな一人一人が心の底から楽しいという笑顔がずっと続いたら、きつといじめのない幸せな日々が送れると思います。今その子は、心の底か



ら笑っています。きつとみんないじめについてよく分かってくれたのでしよう。私はとてもうれしいです。いじめがなくなり世界中が笑顔になることを願っています。

九十九歳の曾祖母から学んだこと

中学校一年

村 上 拓 哉

日本は今、超高齢化社会となり、高齢者が増加しつつあります。増える高齢者で問題になってくるのが、高齢者の人権問題だと思います。最近、特別養護老人ホームでの虐待やお年寄りが悪質商法のターゲットになったりしたニュースをよく耳にします。たとえ直接的に人権を侵害されなかったとしても、「老人のことは自分とは関係ない」「大変そう」というイメージだけで、高齢者の人権問題について無関心な人が多いように思います。僕も去年まではそう思っている一人でした。

僕には今年九十九歳になった曾祖母がいます。島根県に住んでいるので、僕はまだ二回しか会ったことがありません。一回目は僕が生まれたときに、曾祖母が会いに来てくれたそうです。二回目は去年の春、僕が島根県まで会いに行きました。というのも、その年に曾祖母が特別養護老人ホームに入ったからです。僕の祖父は四人兄弟で、曾祖母を特別養護老人ホームに入れることに対して、兄弟の間でいろいろ意見の対立があったようでした。僕の祖父はそのことにずっと反対していました。でも祖父は愛媛県に住んでいて、普段仕事もしているので、曾祖母の介護にいつも関わるとい

うにいきません。曾祖母と一緒に住んでいる祖父の妹が曾祖母の介護をしていました。曾祖母の足腰が弱くなるにつれ、だんだん介護が大変になり、自分も病気になることもあったことから在宅介護の限界を感じ、特別養護老人ホームにお世話になることを考えました。祖父も最終的には渋々了承したのですが、僕も自分の親なのだから、他人に任せず自分で面倒見て当然なのではないか、と思っていました。それに特別養護老人ホームのイメージが、そのときはあまりよくありませんでした。

特別養護老人ホームで会った曾祖母は、車椅子で、足腰こそ少し弱っているものの頭はしっかりしていて、よく喋ってよく笑い、とても生き生きしていました。また、七十年前の出雲大社で、翌日特攻隊として戦地に向かう兵隊さんを見送った戦争の話など、僕たちが知らない話もたくさん聞かせてくれました。職員の方とても親切で、曾祖母の元氣そうな様子を見てとても安心できました。僕のそれまでの高齢者のイメージは、どこか陰があり弱々しいもので、僕の中でどこかに偏見や差別がありました。だが、曾祖母に会ってそのイメージが一気に払拭されました。

高齢者は、これまでの日本を支えて作り上げてきてくれた感謝すべき存在です。しかし、家族介護という問題になると、その負担の大きさや困難な現実があります。僕の両親も、そして僕自身も、いつか高齢者となりその問題に直面するときに来ると思っています。高齢者の人権問題に対して、自分は関係ないんだというのではなく、常に関心を持ち続けることが大切だと思いました。

共に生きる社会をめざして

中学校二年

僕の兄と姉は、障害者手帳を持っている。二人は、出産予定日より四カ月早く、赤ちゃんの標準体重の約五分の一の重さで生まれたそうだ。幼い頃はわからなかったが、僕もだんだん兄や姉の障害がわかるようになった。友達のお兄ちゃんやお姉ちゃんと比べたり、母が生活のすべてを介助しているのに、ショックを受けた。けれど、僕は、兄や姉にとって、たった一人の弟。この先、どのように関わっていったらいいのだろう。

先日、新聞で、先天性下肢まひのある、高校生の弁論記事を読んだ。障害のある自分を受け入れてくれる、家族や友人たちに囲まれ、「生まれ持ったものは平等ではないが、心だけは平等。自分次第で幸せになれる」と思えるようになったという。そして、「体は不自由でも、自分たちは不幸じゃない」と強く訴えていた。

以前、母も、「この子たちの障害がわかったときから、親としては、できるだけ楽しい人生を送ってほしいという願いで育ててきた。それと同時に、人間は、いつも健康で力強いと、弱者に対する思いやりや、人に対する感謝の気持ちが薄れがちになる。

もしかすると、重度障害者を家族に受け入れることによって、とても大切な、貴重な経験をすることができるのではないだろうか。私たち家族は、とても大切な使命を担っているのではないだろうか。」と話していた。

僕にできること、それは、あせらず兄と姉の障害を受け入れること。そして、この地域で生きていくために、障害がある兄姉が、今ここにいることを、できるだけ多くの人に知ってもらうことだと思った。できれば、地域の人たちと交流し、つながりを持ってほしい。僕も、自分にできる役割を勇気を持って率先して果たし、共に生きていきたいと思う。

来春、兄と姉は、支援学校高等部を卒業し、福祉作業所に通うことになっている。社会へ大きな一歩を踏み出す。そんな新しい道に進む兄姉を、僕なりに応援しようと思う。



私たちにできること

中学校二年

鈴木 響太

障がい者にとって今の世の中は生活がしにくいと僕は思います。僕のまわりにはいろいろな障がいのある人がいます。例えば、視覚や聴覚に障がいのある人や、車いすで生活している人です。祖父母も障がい者です。

また、母は手話通訳という仕事をしています。耳が聞こえない人と手話で話します。母と一緒にいろんなところに行くと、聴覚障がいの人にたくさん会います。一緒にテニスをしたりもします。でも、手話を使って話が始めると、僕はほとんどわかりません。「おはよう」「ありがとう」や自分の名前は手話で覚えましたが、会話はできません。

僕が聴覚障がい者にとって「生活がしにくいだろうな」と思ったのは、一か月前です。その日は父と聴覚障がいの祖父と僕で、大泉緑地公園に行きました。その帰りのことです。午後七時に駐車場から出ようとしたら、出口にいつもの係員さんがいなくてバーがあがりませんでした。近くに誰もいません。バーの近くにあったインターフォンを押しましたが応答がありません。少し待つとインターフォンから声が聞こえ

てきて、父と話をしてバーをあげてもらえたので、車を出すことができました。もし、祖父だけだったらどうなっていたのだろう、と思います。声が聞こえないしインターフォンで会話ができないからです。家に帰って母にその話をすると、実際に母の知り合いの聴覚障がいの人が駐車場出口で停まってしまい、後ろに車が並んでしまつて困ったことがあつたそうです。

世の中の不便さはこれだけではありません。視覚障がいの人は、盲導犬といつしよに入れないお店があつたり、車いすの人は、段差で通れないところがあつたりします。他にも僕の知らない不便なことはいっぱいあると思います。

「人権」とは、国民に当然与えられる権利のこと、と憲法に書いてありました。当然与えられるはずのことなのに、与えられていないから不便なことだらけなのだと思います。

少しずつでも改善して、誰もがすごしやすい世の中になればいいな、と思います。

桃からふと考えたこと

中学校二年

辻

慶人

今年も淡いピンク色のみずみずしい桃が届いた。福島県に住んでいる祖母が送ってくれたのだ。祖母は、毎年、福島県産のいちごやさくらんぼ、りんごやぶどうなどの季節の果物を送ってくれる。それらは、新鮮で品質もよく、甘さも味も格別である。僕が生まれてからずっと送ってくれているので、もう十四年も続いている。しかし、届かなかった年が数年あった。それは、震災直後の福島原発の事故により放射線量が高くなったときである。

現在では、除染が進み、農作物の徹底した検査が行われ、福島県産の農作物の安全性は科学的に証明されている。しかし、少しずつ、輸出や購入者が増えてきているものの、残念ながら、福島県産のものは、購入しないという人も少なくない。また、依然、輸入禁止としている国もあり、風評被害は無くなっていないのが現実である。確かに、安全ではないかもしれない、と思う気持ちも分からないわけではないが、科学的に証明されているのだから、僕たち消費者も正しい認識を持ち、偏見を捨て、思いやる気持ちを持ち、福島県を盛り上げるべきではないだろうかと思う。

昨年の秋、原発事故のため、横浜に避難していた少年のいじめが明らかになった。その少年は、転校直後の小学二年生のときにいじめが始まったそうだ。「菌」を付けて呼ばれたり、暴力を振るわれたり、金銭を要求されたりしたそうだ。少年の手記の中に、こんな言葉があった。「今まで何回も死のうと思った。でも震災でいっぱい死んだから、つらいけど、僕は生きると決めた。」と。僕と同じ年であるこの少年は、一人で悩んで耐えて、どんなに辛かったろうと胸が締め付けられる思いがした。そして、彼が生きていてよかったと思うと同時に、彼はそのときは弱者ではあつたけれど、人間として心の強い人だと思った。

このいじめが発覚した後、他の地域でも福島県から避難した子どもたちがたくさんいじめにあっていることが明らかになった。「放射能がうつるから近づくな」とか、「お前らのせいで原発が爆発したんだ」などと言われたそうだ。放射能がうつるなどと、正しい知識をもった人の言う言葉ではない。本当に憤りを感じる。避難した人たちは、みんな何も悪いことはしていない。たまたま住んでいる場所に、大地震が起こり、原発事故のため、仕方なく避難せざるを得なかったのである。慣れない土地で、見知らぬ人たちの中で生活を始めることの大変さや辛さを思うと、どうしてそんな冷たい態度が取れるのか、普通の生活を送る当たり前の権利を奪うことができるのだろうか、と残念でならない。



正しい事実を知り、他人を認め理解し、思いやり、そして自分を制する心があれば、世の中にいじめや差別は起こらないはずである。自分はどんなときも常にそうありたい、と考えさせられる出来事が、最近は多い気がする。

ランドセルの送り先

中学校三年 吉田玲菜

難民と言われて、思い浮かんだのは「遠くの国で彼らを受け入れるのか揉めている」ということぐらいでした。正直難民については何も知らないし、知ろうともしませんでした。

学校の平和学習でアフガニスタンの難民について知ったとき、驚きしかありませんでした。もし、彼らが私たちの暮らしを見たのならば、彼らも驚くだろうと思いました。それどころか、怒り、悲しむだろうと思いました。そんな話を母としていると、母は「あなたとお兄ちゃんのランドセルは、アフガニスタンに送られたんだよ。」と教えてくれました。ランドセルを外国に送ったことは知っていましたが、どこに、どんな人まで知りませんでした。ふと、アフガニスタンで医者になるために頑張る女の子の話を思い出しました。彼女は今も、生きていくために懸命に働いていて、勉強しているとすると、私はどれだけ恵まれているのか改めて実感しました。いじめや虐待のような色々な問題が絶えない日本も、平和とは言えないが、それでもこれらの問題についてじっくり考えたり、それについて調べることもできるということがどれ

だけ幸せなことか、私たちは、その事実について無知に等しいと思いました。必死に毎日を生きぬいて、人を救おうと夢みる少女。色々なものに恵まれていながらも、難民について何も知らなかった私。生まれた国が違っただけで、こんなにも変わることを知って、今の私たちには、彼らを今すぐ助けだすことはできないけど、必死に生きぬいてる子ども、医者になろうと努力している少女たちの未来のためにも、いつか助け出せるように努力すべきだと思いました。助け出せる側として彼らのことをもつとよく知り、真剣に考えていこうと思いました。いつか、ランドセルを送らなくてもいいような未来のためにも。



命の選択

中学校三年

和田 彩佳

私たちの命は、かけがえのない大切なものだ。医療技術の進歩やさまざまな薬が開発されたことにより、今まで治らなかつた病気の治療が可能となり、命の期限が延び、さらに研究が進む中、「人の臓器を造る」ことはできずにいる。

先日、テレビから流れてきたニュースは、「生まれつき心臓の悪い子どもが臓器提供をしなければ長くは生きられない」というものだ。私は、ふつと以前、弟のお見舞いに行ったとき、病院の受付で見かけた黄色いカードのことを思い出した。「ドナーカード」だ。

私は、ドナーカードについてもつと知りたくなり、インターネットで調べてみることにした。そこには『脳死』という言葉がでてきた。『脳死』とは、心臓は動いているが脳の機能が完全に止まってしまった状態、回復する可能性はないとされている、と記されていた。他にも、脳死に直面した家族の思い、その人を取り囲む人たちの思い。そして、移植を待つ人の思い、「生きたい」という願い。沢山の思いが記されていた。

私は、母に「私が『脳死』って言われたら、臓器提供する？」と聞いてみた。すると母は「ごめん。出来へんわ。自分の子どもが『脳死です』って言われても心臓は動いている。『このまま目が覚めることはありません』って言われても、心臓が動いている限りお母さんはキセキを待ち続ける。一分でも一秒でも、長く生きていて欲しいって願うのは、親として当たり前の感情やと思うから。」と言った後、少し時間を置いて、「でも、人間は勝手やから、もし逆の立場やったら、一人でも多くの人が臓器提供に賛成して、一日でも早く、一時間でも早く自分の番が回ってきて欲しいって願うんやろうな。難しいな。」と言った。

普段、命についてあまり話したことがなかったので、改めて母の愛を感じ、命の尊さに気付くことができた。それと共に、「ドナーカード」に記入することの難しさを知った。

十五歳になる私たちには「ドナーカード」を自分たちで記入する権利がある。だからこそ、もつと話し合い、もつと考え、最善の選択をしなければならない。その為には、もう少し時間がかかりそうだと思う。

助かることのない命を前にしたとき、助けられるかもしれない命を前にしたとき、私たちはどちらの選択をすればよいのだろうか。大切な人の命、命のリレーについて、もつと考えなければいけないと思う。



いつか、医療の進歩によつて、「人の臓器」を造ることができるときがくるまで、
私は悩み、考え、生きていこうと思う。

手話は言語

支援学校高等部三年

福 満 祐 斗

私は生まれつき聴覚に障があります。今は聴覚支援学校に通っていますが、私は軽度の難聴であり、小・中学校は一般の学校に通っていたので、健常者とコミュニケーションをとることができます。そして、ある友達の体験話を聞くまでは、なんとなく手話を使っていました。

その友達は、電車の中で手話を使って会話をしていました。すると、同じ車両に乗っていた健常者に見られ、馬鹿にするような顔で笑われたり、手話の真似をされたりしたそうです。その話を聞いて、私は「どうしたら理解してくれるのか。」と思いました。しかし落ち着いて考えると、手話を見られるということは、手話を知ってもらえるチャンスになるかもしれません。電車の中で声を出して話すと、内容が近くの人に聞こえたり、迷惑をかけてしまったりします。しかし手話の場合、手でサインを出して話すので、迷惑がかかるようなことは極めて少なくなるというメリットがあります。また、離れた場所から用件を伝える際、大声を出す必要もなく、携帯を使う必要もなく、手話で容易に用件を伝えることができます。手話は、様々なところで視覚

を駆使すれば役立つものです。

では、多くの人に手話というコミュニケーションの方法に興味を持ってもらうためには、どうしたら良いでしょうか。それについて、私は最近とても嬉しく感じたニュースがあります。それは平成二十六年から開催している「手話パフォーマンス」という大会に、健常者の高校生たちが参加し、賞を取ったというニュースです。その高校生たちは、芝居を発表し、気持ちを手話で表現していました。手話は、一つの身体表現です。歌で気持ちを表現するには声ですが、声で表現できなくても、手話で表現することができます。手話は言語だからです。このように手話を知ること、障がいを理解するきっかけに繋がればと思います。手話を使うことで、自分の何かを変えられるのかもしれませんが。私は手話は言語だと知ってほしいため、三年間、舞台上で手話歌や、手話ダンスを披露しました。その結果、たくさんの方からエールをもらいました。他にも中学校で知り合った友達と遊ぶことがあつて、その友達に時々、手話を教えています。会う度に教えた手話を使ってくれます。手話を知ってもらうだけで嬉しさが溢れます。少しでも自分の周りにいる人に興味をもってもらえるように、これからも積極的に手話を伝えていきたいです。

私は、子どもが欲しいのかな？

支援学校専攻科二年

石橋 梨奈

私は子どもが欲しいと心の底から思えない。もし、子どもができたら出産はしてみたい気持ちはあるが、子どもを育てる自信がないからだ。というのも、私には聴覚障がいがある。子どもも私と同じように聞こえなかったらどうしよう。家族全員に聴覚障がいがあるデフファミリーという言葉があるように、聞こえない子どもが生まれてくる可能性が大いにあるからだ。私に聴覚障がいがあることで、苦労した道を歩ませてしまうことになるかもしれない。私と同じように、健聴者に理解されず、苦しんだことを経験させてしまうかもしれない。それを私は支えることはできるのだろうか、と不安になるからだ。

また、子どもが健聴者だったら、どうするのだろうか。私の聴覚障がいをどのように説明したらいいのだろう。どのように理解してもらったらいいのだろう。親子間でのコミュニケーション面で悩みがたくさん出てくると思う。

どちらにしても、不安しかないので、子どもを産まないで自分の人生を歩んでいく生き方もある。

だが、その選択をしたら、私の両親はどう思うのだろうか。私たち聞こえない三兄弟をここまで育て上げてくれた両親に、孫の顔を見せてあげたいという気持ちも心のどこかにある。近所のお姉さんに小さな子どもがいて、その子どもに対して両親は、いつも嬉しそうに可愛がっているからだ。そんな両親の顔を見ると、できれば子どもは私と同じ聴覚障がいがなく、ほかの障がいもなく、健常者として、私のところに無事生まれてきてほしいと思う。両親を喜ばせたい気持ちと、私たちを育てていたときのしんどい思いをまた、させたくない思いがぶつかり合い、何とも言えない感情が心の中にある。それは結局、私のエゴなのだろうか。

私自身、私たちに向き合ってくれた母の気持ちを知りたい。母は健聴者だが、私たちが聞こえないと分かっても、しつかり顔を見合って、分かるまできちんと話をしてくれた。聞こえないことがかわいそうだとも思わずに、時に厳しく、時に優しく接しながら育ててくれた。そんな母だからこそ、私が聞こえないことで、辛いことや悲しいことがあっても、すぐに母に相談したり、話したりすることができた。

だから、そのときが来れば私は母のように、よき相談相手でありたい。そのためには、お母さん、もう少し甘えてもいいかな？

「自分らしく」が認められる社会へ

成人

中学校の昼休み、私が保健室でお弁当を食べていると、来室した生徒が「お弁当のおかずなに？」と聞いてきました。しばらくお弁当について話をし、話の流れから我が家では夫がお弁当を作っていることを伝えると、

「先生、女なんやからちゃんとは作らなあかんやん！」

という言葉が返ってきました。我が家では結婚前から夫がお弁当を作ってくれていて、日常の家事も分担して行っています。例えば、食事を作るのは私の仕事、洗い物は夫の仕事。そう伝えると、不思議そうな顔をして教室へ戻っていききました。

まだ十三歳の子どもから「女らしくしなさい」と言われた気分になり、いったい何歳からジェンダーの押し付けが始まっているのだろうと驚き、自分の過去を思い出してつらい気持ちがよみがえってきました。

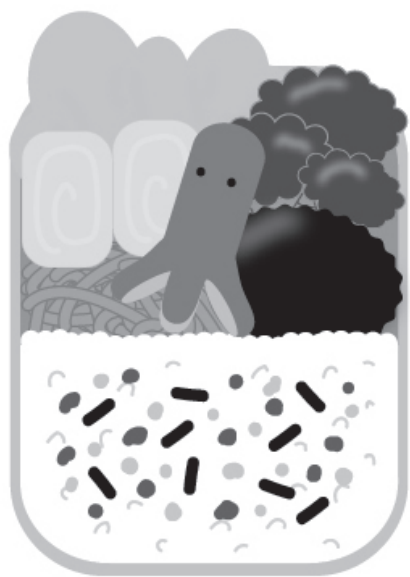
私は「女は女らしく」という家庭で育てられました。しかし、親の思惑から外れ、男の子とばかり遊び、ゲームやプロレスなど、二十年前は男の子の趣味と言われるようなもののばかりに興味を持っていた私にとって「女らしく」は呪いの言葉でした。

「女らしくしなさい」と言われれば言われるほど「自分らしさ」を否定された気分になりました。そして「女らしくない」私は「女ではない」と言われたと感じるようになり、一時は本気で「男の子になりたい！そうすればもう二度と『女らしくしなさい！』と言われなくてすむのに。」とさえ思っていました。

教員をめざして大学に通っていたころ、一人の小学生と出会いました。その子は体は女の子でしたが、男の子のようにふるまって生活していました。そのことよりも驚いたのは同じクラスの児童たちが、その子のことをそのまま受け入れていたことでした。誰もからかったり、「なんで女らしくしないの？」などと聞いたりしません。クラスの中でその子はのびのび生活していました。その子だけでなく、みんなが元気に楽しく学校生活が送れている教室で、一緒に過ごさせてもらいうちに、性別による「らしさ」ではなく、「自分らしさ」を出せる場所の大切さを、子どもたちから教えてもらいました。

教員になり十年以上が経過しました。その中で、私が子どもたちと接するときには、付けていることがあります。それは固定観念によって作られた「○○らしく」を子どもたちに押し付けるのではなく、その子自身を見て、そのまま受け止めようということです。

「自分らしく」が認められる社会を作っていくためには、まずは子どもたちが「自



「分らしき」を認められる体験をし、その居心地の良さを感じていくほかはないと思っています。そんな社会を作るため、今日も私は子どもたちと一緒に、「自分らしく」が認められる学校を作っていこうと思います。

彼の色

成人 佐々木 航わたる

小学5年生の夏、私は彼が嫌いだった。

同じクラスにいた彼は、時々、突然大きな声を出したり暴れたりするので、私は常に神経をつかっていた。彼は知的障がい者で、同じ授業を受けてはいたが、私の中では「彼は普通とは違ってヘンだ、可哀想だ。」という、ある種の差別的な感情を持つており、極力関わらないようにしていた。

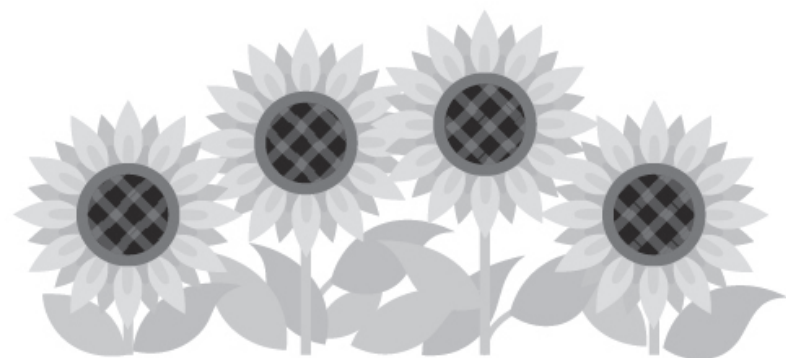
そんな中、ある日、近くの公園へ向日葵の絵を描きにいく授業があった。二人ずつのペアで一緒に描き、絵の感想を言い合うというものだ。組決めの結果、彼と一緒にペアになってしまった。ほとんど喋ったことがない障がい者の彼と、二人で絵を描くのだ。どうせ彼は突飛な行動をするだろうし、絵も下手で感想なんて言えつこない。そう思っただけで下がった。しょうがなく、私は彼に「どこで描きたい？」と聞くと、突然彼は「あの丘の上がいい！」と言い、私の手を引いて歩き始めた。目的の場所に着くと、すぐに夢中で描き始めたので、彼の積極的な行動に驚きつつ、私は早く終わることを願って、彼に背を向けながら絵を描いた。数時間後、結局最後まで一度も話

さないまま、感想を言い合う時間になった。お互いに画板を交換し、おもむろに彼の絵に目を落としたそのとき、私は息をのんだ。そこには今まで見たこともないような美しい色彩の大きな向日葵と、抜けるような青空が丁寧に、緻密に描かれていたのだ。「すごい！」思わず口をついて出た私の言葉に、彼は驚きながらもくしゃくしゃの笑顔で小さく「うれしい」と答えてくれた。その瞬間、私は雷に打たれたような強い罪悪感を感じた。こんなすごい絵を描ける彼を、どうして「可哀想」だなんて決めつけて、嫌っていたんだろう。自分のこれまでの行動や感情に胸が締め付けられ、その日は家に帰っても夕飯が喉を通らなかった。

次の日から私は変わった。彼に積極的に話しかけ、色塗りのコツや面白い描き方を聞いた。そして次第に、私と彼は絵を描きあう友達になっていった。相変わらず声を出したり突然体を動かすこともあったが、そんなことは気にならなくなった。周りの友達も次第に変わり、最後には休み時間になると、彼の周りには沢山の友達が集まるようになっていた。

このときの体験から、私は、障がい者への差別や偏見をなくす第一歩は、障がい者の方が持っている個性をまず見つける努力を始めることだと考えるようになった。あえて「努力」という言葉を使うのは、能動的な行動なくしてこの問題は解決できないと思うからだ。一人一人が世の中の障がい者の存在に向き合い、個々の個性を理解し

ようとする姿勢こそが、私たちに必要であり、また不足していることだと今強く想う。
その後、私は絵を描くことが好きになり、美術大学へ進学した。私の人生まで変えた彼とあの向日葵の絵を、私は忘れない。



先生の言葉

成人 村上 美也子

「あの子、変わってるよなあ。」図書館の片隅で絵本を読んでいる男の子に対して、私の友達が私に言った言葉だ。

その男の子は図書館にいるにもかかわらず、時おり一人で笑ったり、ブツブツと何かつぶやいたり、体をゆすったりしていた。同じ小学校の養護学級に通っている五年生の男の子だ。

「・・・そうやな。なあ、あっち行こ。」と私は友達に声をかけ、その場を逃げるように離れた。実際、私はその場から逃げたかったのだと思う。

これは三十年前の私の記憶だが、今も鮮明に覚えている。場所や匂いもすぐに思い出せる。

当時、四年生だった私には知的障害があるということがいた。それが彼である。その頃、自分に「普通ではない」ところがあるということを恥ずかしいと思っていた。そして、「恥ずかしい」と思ってしまう自分が恥ずかしかった。「あの子、私のところやねん。」と堂々と言えたら、どんなにいいだろうと思っていた。

ある日、当時の担任の先生が教室で言った。「君たちが自分とは違う誰かを見て、例えば体が不自由な人や社会的にみて立場が弱い人に対して『かわいそう』と言ったり、思ったりするのは何か違うと先生は思う。君たちはどう思う。」

この言葉によって私は自分のいところについて、また自分のいところに対する気持ちについて考えるきつかけになった。

そもそも、なぜ「普通ではない」と考えるのか。「普通」とは何なのか。体が五体揃っていて不自由なく過ごせて、欠陥のない人間が「普通」なのだろうか。だとしたらこの世に「普通」の人間は少ないのではなからうか。みんな何かしら苦手なものがあふし、そんなことを言い出したら私なんか欠陥だらけだ。

そんな結論にいたったとき、自分のいところの顔が思い浮かんだ。彼は確かに周りからみると、行動や言動が少しおかしくみえるかもしれない。だからといって人からかわれたり、色々言われたりするのとはおかしい。

彼に障害があるのは彼のせいではない。

私が彼を「普通ではない」「恥ずかしい」と思ってしまうのは、私の考えが間違っていたんだ、とそこで気付いた。

それから私が五年生になり、図書館と同じような場面に出会ったとき「あの子、私のところやねん。」と笑って言えるようになった。

私は自分のことが前よりも好きになった。
三十年経った現在、私は小学校講師として四年生の担任をしている。私が考えを変え
るきっかけとなった、あの先生の言葉を聞いた学年だ。あの言葉を自分のクラスの
子どもたちに投げかけてみようと思う。

「先生はこう思う。君たちはどう思う？」



ゆつくりのんびり、そんな気持ちになりました

成人（中学校夜間学級三年）

曹ちよう澤てつ順すん

殿馬場中学校夜間学級の曹澤順です。今日は、私の子どもの頃から今までの話をしながら、学びの大切さを訴えたいと思います。

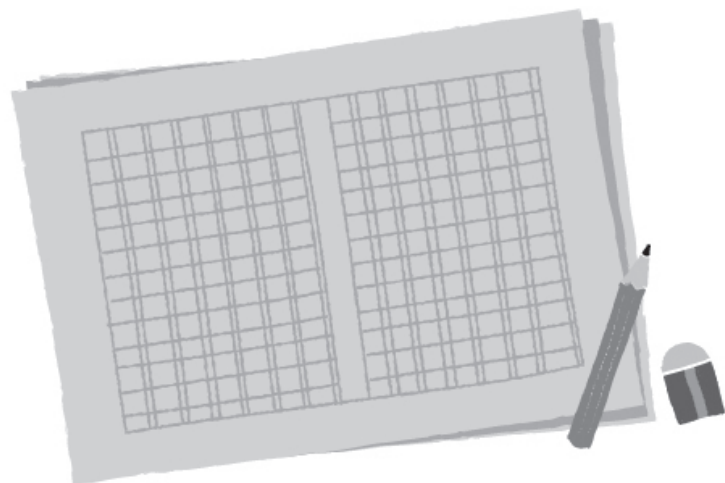
私の母は十六歳のとき、祖母に連れられ日本にやって来ました。そして、十九歳で結婚したそうです。母は無学でしたが、生活をしていく上でのお金の計算や、仕事をする上での知恵は、ものすごく働く人でした。生活のため、母は外に出て働かなければなりません。幼い私は母に家にいてほしかったので、寝るときは必ず母のスカート裾をつかんで寝ていました。朝、目をさますと、母の姿はありませんでした。そんな日々の中、気づけば私は朝鮮学校に通っていました。その頃は、朝鮮が植民地から解放されて、親は自分の子どもは「朝鮮人として育てなければならぬ」という気持ちに燃えていました。ですから、私も当然のように朝鮮学校に入学していたのです。ところが、五年生のときに朝鮮学校は閉鎖されてしまいました。朝鮮学校の先生は、「日本の学校に行っても朝鮮人であることを忘れるな。」と言いました。返事をするときも、「はい」ではなく、「イエ」と答えるように教えられました。しかし、

いざ日本の学校に行ったら、そういうわけにはいきません。全部が日本語での日本の勉強なので、朝鮮学校から来た子どもに気遣いなどしてくれません。算数の勉強以外、さっぱり分からなくなりました。六年生が終わると、親も中学校に行けとは言わないし、私も行きたいとも思いませんでした。

そして、七人兄弟の長女であった私は、一日八十円もらえる仕事につきました。今となってはどんな仕事だったのかも思い出せませんが、とにかく働いて、働いて、働き続けました。働くことで周りの人に認めてもらおう、何よりも、人よりたくさん働けば良いという考えで、とにかく働き続けました。知らないことがたくさんあり、字もちゃんと書けない。でも、そんなところは、人には見せずにやってきました。だから、何か字を書けと言われると、腹が立って腹が立って、もう投げ出して逃げてしまいたいと思うことが何度もありました。

夜間学校に通っている人の話は聞いていましたが、私は子育てと仕事に追われて手いっぱいだったので、学校に行くことはできませんでした。仕事で働いているうちに、腱鞘炎にかかって、仕事ができなくなりました。病気になって、ようやく学校へ行けるようになったのです。役所に電話をすると、殿馬場中学校夜間学級のことを丁寧に教えてくれました。七年前のことでした。

夜間学校に来てからは、自分が今まで体験できなかったことや、知らなかったこと



を体験し、知ることができました。新しいことを体験し、新しいことを知る連続でした。今まであれほど書くのが嫌でしかたありませんでしたが、ゆつくり落ち着いて、字を書くようになりました。これからは、肩ひじ張らずに、ゆつたりした気持ちで何事にも挑戦していこう。そんな心持ちで、今日も頑張りたいと思います。

「言葉」の力

成人 長村 由香莉

「たわし」「アフロ」「鳥の巣」「ハチの巣」「やきそば」「実験に失敗した博士」これらの言葉は、私を見た人たちが私に言った言葉の一部です。

私の髪の毛は天然パーマで、パーマを当てているのではないかと間違われるほど、カールしています。

幼稚園や小学校低学年のころ、友だちはその髪型について、ほとんど気にせず、私自身も気にすることなく過ごしていました。

しかし、小学校四年生のころから、髪型について、数人からいじられ始めました。徐々に私のことをいじる人が増え、「たわし」などと呼んで、からかい、私を無視したり、足を引っかけたりするなどのいじめ行為がおこなわれるようになりました。毎日続くようになり、「学校に行きたくない」と思うようになりました。

けれど、「学校に行かなければ負け」「親や学校の先生に迷惑はかけられない」と考え、誰にも相談することなく、中学校二年生までの約五年間、学校に通いました。中学校二年生のとき、勇気を出して担任の先生に相談し、精神面で支えていただき、

中学校卒業まで生活しました。結果的に、いじめは中学校を卒業して、人間関係を断つことで終わりました。

いじめた人、いじめを見ていた人、自分には関係ないと見て見ぬふりをしていた人は、この出来事に対して、何かを思うこともなければ、記憶として頭の片隅に、これっぽっちも残っていないかもしれません。

しかし、いじめられた人は、何年経つても忘れることなく、ずっと心の傷として残り続け、その先の生き方にも何かしらの影響を与えます。これらの経験を糧に精神的に強くなる人もいれば、乗り越えられず悩み続けたり、この人生を終わりにしてしまおうと考えたりする人もいます。

だから、今、いじている人、いじめを見ている人、見て見ぬふりをしている人、今すぐやめてください。「大丈夫?」「ごめんなさい」などの言葉をかけてください。一人でいじめをとめることが難しいなら、他の友だちと話し合ったり、先生に相談したりしてとめてください。一人の勇気で救われる友だちがいます。

いじめられている人、辛いですね。苦しいですね。その思いを信頼のおける人に言葉で話してみてください。話すだけでも気持ち楽になります。一人で悩む必要は一切ありません。

言葉は、ときに人を傷つける凶器になりますが、人を癒す魔法にもなります。また、



自分の思いを言葉にすることで、気持ちが悪くなることもあります。だから、子どもたちの見本である大人が、一つ一つの言葉遣いに気をつけて、言葉を発することが非常に大切だと考えます。

私の友人

成人 大 所 眞 吾
だいどころ しんご

※ 私にはシスジェンダーでゲイの友人がいる。私は大学に入るまで、いわゆるLGBTまたは性的マイノリティと呼ばれる人たちと、話したり接したりする機会がなかった。そういうこともあつてか、授業で「LGBT」などという言葉も聞いても、「Gはゲイのことだな。LやBは聞いたことあるな。あとのTは何なんだろう。Bって、男性女性どちらでも好きになれる人だっけ。」という程度の認識しかなかった。近年、テレビなどで性的マイノリティであることを公言している人は増えてきているように感じるが、まだまだ社会の認知度は低いだろうし、彼らの恋愛や結婚については容認されていない。私もシスジェンダーでゲイの友人（以下Jさん）と出会うまでは正直良いイメージをもつてはいなかった。性的マイノリティの人たちに何かをされたわけでもなかったのだが、自分たちとは異なる、得体の知れない人たち、そのような偏見をもっていた。

しかし、Jさんと出会ったことで、私のイメージは一転した。Jさんは頭が良くとても物知りで、話が面白く、とても親しみもてる。友人も多く、よく声をかけた

り、かけられたりしている。そして、恋愛の話などをしているときに思うことが、好きだと感じる対象が違うだけで、好きだと思う気持ちは何も変わらない、ということだ。性格は色々あつて、認められているのに、性別や好きになる対象はどうして二パターンしか認められていないのか。

以前の私のように、性的マイノリティの人々に偏見をもっている人は少なくないと思う。しかし、それは性的マイノリティの人たちと触れ合ったことがなくて、知らないから怖い、と感じているだけなのではないか。そして、触れ合ったことがないのは、身近に性的マイノリティの人たちがいないのではなく、身近にいても知らないだけなのだ。なぜ知らないかは、社会の風潮などのせいでも、多くの性的マイノリティの人たちが公言することをためらわされているからではないか。負のスパイラルである。このスパイラルを断ち切るためには何ができるか。

私にはシスジェンダーでゲイの友人がいる。胸を張ってそう言える。当事者の人たちが誰にでも打ち明けられる日が来るためには、社会全体が正しい知識をもつこと、当事者たちをしつかりと知ることが必要である。性的マイノリティの人たちと出会って、もつと知ってほしいと思う。

※「シスジェンダー」とは、からだの性とこころの性が一致している人のことです。

その一言は

成人 吉川英輝

「大丈夫か。」ある初夏の正午頃、昼食を食べるために食堂に向かつて歩いていたら、背中を小突きながら声をかけてくる人がいた。振り返ってみると、普段はあまり話さない同じ職場の先輩だった。「えらく下を向いて歩いていたら気になって。」と先輩は言った。確かに、その日の週は仕事でボカミスが相次ぎ、自己嫌悪に陥っていた。何をやっても、うまくいかず、なんてダメな人間なんだ、と思いながらその日も過ごしていた。その先輩とは仕事の話や、家族の話、趣味の話など、他愛もない話をしながら食堂まで一緒に歩いた。短い時間だったが、不思議と肩や心がすつと軽くなるような気がした。先輩の言葉は私の悩みを解決してくれるものではなかったし、励ましてくれるようなものでもなかった。それでも、昼食を終えた私の中には「何とか頑張ろう。」という気持ち芽生えていた。

先輩の短い一言は、なぜ私の心に染み入ったのだろうか。その理由は、先輩の言葉に「私を見ているよ。」というメッセージが込められていることに、気づいたからではないかと思う。『人は一人では生きていけない』とはよく聞く言葉だ。人と人とは

互いに認識し合わない生きていけない。そのツールの一つが言葉である。私という人間を認知し、気遣ってくれる人がいる。先輩がそれを、言葉を介して伝えてくれたことに、私は大きな喜びを感じたのだ。

私はこの経験をしてから、上司、先輩、同僚、後輩関係なく、とりあえず声をかけるようにしている。「顔色悪いな。」「疲れてそうだね。」「今日は元氣そうですな。」と、見て感じたことを相手に伝えていく。相手の多くは、そこから仕事の話、悩みなどを話してくれ、逆に私の話を聞いてくれるときもある。最初にかけた言葉が当たっているときもあれば、間違っているときもある。しかし、それはあまり重要ではない。最初の一言を通じて、そこから繋る短い会話を通じて、相手に「私はあなたのことを見ているよ。」と伝えることが大事なのだと思う。私がそうしてもらって嬉しかったのと同じように。

普段何気なく発している言葉だが、使いこなすのはとても難しい。同じ言葉でも人によって捉え方が違うし、同じ人でも状況や気分によって捉え方が変わるからだ。それでも、これまで私たちは言葉を使ってお互いを感じてきたし、これからも変わらないだろう。何気ない一言が、人を喜ばせ、楽しませ、嬉しくさせる。一方で、何気ない一言が、人を怒らせ、哀しませ、傷つける。今この瞬間、発しようとしている『その一言』は、相手を見て、相手のことを思っている言葉となっているだろうか。私は、常にそれを考えながら、日々の言葉を紡いでいきたいと思う。

選考にあたって

このたび「第三十八回わたしからの人権メッセージ」にご応募いただいたみなさん、どうもありがとうございます。また、特選を受賞された二十名のみなさん、入選を受賞された三十名のみなさん、おめでとうございます。

今年度は、二千三百四十七点にも及ぶ多くの作品が寄せられました。このうち小学生が一千八十七点、中学生が二百二十三点、高校生が二十一点、成人が百十六点でした。この取り組みの広がりと深まりを審査員一同、うれしく思います。

選考では、一次審査で二千点を超える作品を五十点に絞り込み、さらにそこから二十点の特選作品を選出いたしました。

審査にあたっては、さまざまな体験や知り得たことを自分自身の問題として捉えられているか、差別をなくすためにどのように行動しようとしているか、またその作品が広く市民の人権意識向上につながるものであるかを、大切なポイントといたしました。

今年度は、応募作品数が増え、その中にはさまざまな年齢層の方からのすぐれた作品がたくさんあ

りました。実際に日頃から人権に関わる活動をしている方の作品もあり、堺市における人権意識の広がりや、市民のみなさんの日頃の活動内容がよく分かる内容でした。小学生、中学生からは、友だちにかけてもらった言葉のあたたかさや、よい先生と出会って、将来の夢をもったというものの、家族と人権について話したことなどの、日常の中で人権の大切さを考えている作品が印象的でした。また、里親と里子、障がいがある兄とその妹など双方で人権作文に取り組んでいたたり、毎年、継続的に作文をご応募いただいたりと、お互いを思いやる気持ちや人権に対する募る思いが感じられました。

このように、どの作品からも、差別のない平和な社会をつくりたいという願いが伝わりました。想いのこもった素晴らしい作品との出会いを、ありがとうございます。

また、メッセージとして届いていない人権課題や声なきSOSもあると思います。そのことを忘れずに、私たちは今後も人権を守るための積極的な活動に取り組んでいきます。

「わたしからの人権メッセージ」を契機として、すべての人が人権問題を自分自身のこととして捉えて行動し、堺から人権文化の花が咲き、人権尊重の輪が家庭、学校、職場そして地域社会へと広がっていくことを願っております。

審査員長 山口典子

(堺市人権教育推進協議会 副会長)

ご応募いただいた学校その他団体名

浅香山小学校	市小学校	英彰小学校	榎小学校	家原寺小学校
大泉小学校	☆鳳小学校	鳳南小学校	神石小学校	☆北八下小学校
☆城西小学校	久世小学校	光竜寺小学校	さつき野小学校	三宝小学校
城山台小学校	泉北高倉小学校	竹城台東小学校	津久野小学校	登美丘東小学校
中百舌鳥小学校	西陶器小学校	庭代台東小学校	上神谷小学校	☆野田小学校
☆土師小学校	☆はつしば学園小学校	☆八田莊西小学校	☆浜寺東小学校	原山台小学校
☆東浅香山小学校	東深井小学校	東三国丘小学校	平岡小学校	☆深井小学校
福泉小学校	福泉中央小学校	榎塚台小学校	御池台小学校	☆美木多小学校
☆三国丘小学校	☆三原台小学校	桃山台小学校	安井小学校	熊野小学校
若松台小学校				
☆赤坂台中学校	☆浅香山中学校	旭中学校	☆泉ヶ丘東中学校	☆上野芝中学校
大泉中学校	大浜中学校	☆金岡北中学校	☆金岡南中学校	五箇莊中学校
さつき野中学校	津久野中学校	☆殿馬場中学校	☆殿馬場中学校夜間学級	☆中百舌鳥中学校
八田莊中学校	原山台中学校	晴美台中学校	平井中学校	深井中学校
☆深井中央中学校	☆美木多中学校	☆南八下中学校	美原西中学校	☆陵西中学校
陵南中学校	若松台中学校			
だいせん聾高等支援学校				
インターユース堺 (IYS)	NPO法人エコ サイクルネットワーク 里親会「つながり会」	☆(株)クボタ堺製造所	堺・教師ゆめ塾	堺識字・多文化 共生学級「つどい」 (五十音順)
☆堺自由の泉大学				

※五年以上連続で応募があった学校や団体には、☆印をつけています。
ご協力ありがとうございました。

審査員

加藤勝徳	(堺市人権教育研究会研究部長)
佐野勝久	(堺公共職業安定所管理部長)
瀧口住子	(堺市教育委員会女性センター館長)
中山真裕美	(堺市総務局人事部人材開発課長)
根本進	(大阪法務局堺支局総務課長)
平井純子	(堺市人権教育推進協議会常任幹事)
福井宏尚	(堺労働基準監督署副署長)
美濃部桂子	(堺市人権教育推進協議会常任幹事)
山口典子	(堺市人権教育推進協議会副会長)
吉田真知子	(堺市教育委員会生徒指導課指導主事)

△敬称略・五十音順▽

第38回わたしからの人権メッセージ 特選作品集

2017年12月発行

編集・発行 堺市人権教育推進協議会
〒590-0078 堺市堺区南瓦町3番1号
堺市市民人権局 人権推進課内
電話 072-228-7420
FAX 072-228-8070

私たちのまち堺から
人権文化の を咲かせよう

この作品集は、「第 38 回わたしからの人権
メッセージ」に応募された 2,347 点の作品
のうち、特選作品 20 点を掲載したものです。